

ほんがいっぱい よんでみよう!

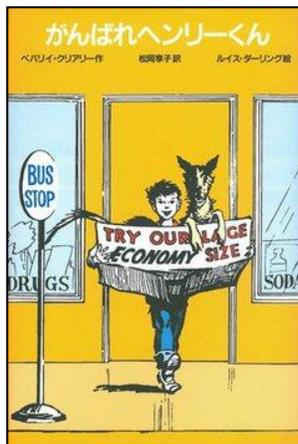


ねんせい ほん 5・6年生のための本

① 『がんばれヘンリーくん』

ベバリイ=クリアリー／作 さく まつおかきょうこ やく 松岡享子／訳
ルイス・ダーリング／絵 え がっけん 学研《Fク》

いぬ 犬がほしかったヘンリーくん。ひろったのら
いぬ 犬といっしょに、バスで家に帰ろうとした。でも、いれ物に入れなくちゃダメなんだって。ふくろにつめてなんとか乗ったけど、いぬ 犬があばれて大騒ぎ。とうとうパトカーまでやってきて…。



② 『図書館がくれた宝物』

としょかん 図書館がくれた宝物 たからもの
ケイト・アルバス／作 さく くしだりえ やく 榎田理絵／訳
とくましょてん 徳間書店《Fア》



だいにじせかいたいせんちゅう 第二次世界大戦中、ロンドンでくらしていた3人のきょうだい。親がわりのおばあちゃんを亡くした3人は、保護者となってくれる人を探するため、田舎へ疎開する。疎開先の家庭でいじめられるなか、3人を支えてくれたのは図書館とその司書で…。

ところざわ しりつところざわ としょかん
所 沢市立 所 沢図書館 2024年 ねん

③ 『金色の羽でとべ』

きんいろ はね
たかだゆ きこ さく しょうがくかん
高田由紀子／作 小学館《Fタ》

そら れい しょうぞく
空良と玲が所属するバレーボールクラブに、
てんこうせい やまと にゅうかい
転校生の大和が入会してきた。ずば抜けてうまい
やまと しん
大和は、新チームのアタッカーとなった。ところが
ひ れんしゅうじあい やまと
ある日、練習試合でキレてしまった大和のせいで
かんとく け が しあい ちゅうし いちがん
監督が怪我をし、試合は中止に。チームが一丸となることはできるのか？



④ 『ロッタの夢』

ゆめ
ノーマ・ジョンストン／作 さく たにぐち ゆみこ やく 谷口由美子／訳
ひらさわともこ え いわなみしよてん
平澤朋子／絵 岩波書店《Fジ》



かぞく そこく
ロッタと家族は、祖国ドイツを出てアメリカ
じょうりく ま
に上陸した。アメリカで待っていたのは、薄っ
ぺらな壁の小さな家だけ。外国人のロッタたちはアメリカで教育を受けられず、父は仕事をクビになりお金もない。絶望するロッタに手をさしのべたのは、オルコット家の人々で…。

⑤ 『あきらめなかった男』

おとこ
こまえりょう さく おとないちあき え せいざんしゃ
小前亮／作 おとないちあき／絵 静山社《Fコ》

てんめい ねん せんどう こうだゆう かいせん しんしょうまる
天明2年。船頭の光太夫は、廻船「神昌丸」で
えど む とちゆう あらし ひょうりゆう
江戸へ向かう途中、嵐にあい漂流してしまう。
はんねんご きた こうた じょうりく しんしょうまる
半年後、やっと北の孤島に上陸するが、神昌丸は
うみ しず びょうき いき じょうりん
海に沈み、病気で息をひきとる乗員もでてしまった。しかし光太夫は決して、日本への帰国をあきらめなかった！



⑥『だれも知らない小さな国』

さとう さく むらかみつとむ え こうだんしゃ
佐藤さとる／作 村上勉／絵 講談社 《Fサ》

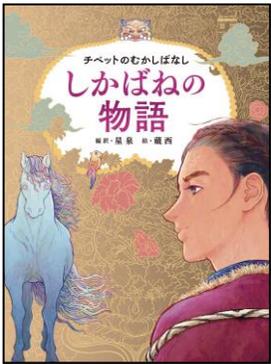
しょうがく ねんせい としき ぼくは やま こゆび
小学3年生の時、ぼくは山で、小指ほどしか
ちい ひと を み なが おがわ なが あか
い小さな人を見かけた。小川に流されていく赤い
くつの上で、かわいい手をふっていたんだ。あれ
は、昔からこの小山に住んでいるという、
いっすんぼうし 一寸法師のこぼしさまにちがいない！



⑦『しかばねの物語』

ほしはずみ へんやく くらにし え のら書店 《M》
星泉／編訳 蔵西／絵

デチュー・サンボは竜樹大師から、幸いをもた
らすしかばねを墓場から連れてくるよう命じられ
た。しかばねを背負っているあいだは、ひと言も口
をきいてはだめだという。大師の教え通りだまって
歩いていたデチュー・サンボだったが、しかばねが
口を開き、物語を語りはじめ…。



⑧『ふしぎ草子』

とみやすようこ さく やまむらこうじ え
富安陽子／作 山村浩二／絵
しょうがくかん 小学館 《Fト》

ゆき なか ねこだにおんせん たど
雪の中、“猫谷温泉”に辿りつ
やじま ねこなし み はなし き
いた矢島さんは、民宿のおじさんか
ら「猫梨の実」の話の話を聞きました。
ねこなし み まず じだい むらびと
猫梨の実は貧しい時代の村人た
う すすく じつ おそ
ちを飢えから救いましたが、実は恐
ろしい毒があり…。こわい話やふ
しぎな話が8つ入っています。

⑨『どっさりのぼく』

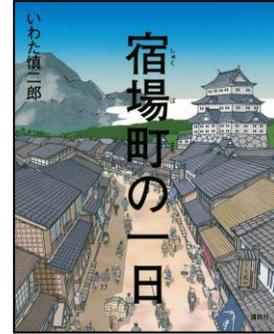
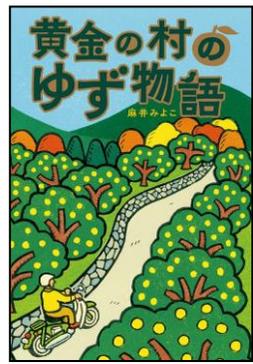
こいけまさよ へん おおただいちは が
小池昌代／編 太田大八／画
あかね書房 《91.1》

とこや 床屋さんには ぼくがどっさりい
るって、一体どういうこと？（「ど
っさりのぼく」より）ほかにも、「木
はえらい」や「朝のパン」「ピアノ
やめたい」など、日々のなにげない
できごと い かんが
出来事から、生きることを考える
詩がいっぱい！

⑩『黄金の村のゆず物語』

あさい ちよ ポプラ社 《62》
麻井みよこ／著

1960年。山奥にある木頭村を訪れた白木さん
は、村人たちをまずしさから救いたいと考えた。白木
さんが目つけたのは、実をむすぶのに18年かかる
「大ばかのゆず」！村人からできそこないと言われた
ゆずは、村を豊かにできるのだろうか。



⑪『宿場町の日』

いわた慎二郎 作・絵 講談社 《21》

江戸時代、「はたご屋」とよばれる旅館があ
つまった宿場町は、たくさんの人でにぎわって
いました。夜明けまえからじゅんぴでおおいそ
がしな、宿場町の日をのぞいてみましょう。

⑫『さようならプラスチック・ストロー』

ディー・ロミート／文 ズユエ・チェン／絵
ちばしげき やく みつむらきょういくとしょ
千葉茂樹／訳 光村教育図書 《51》

ストローが歴史に登場したのは、5千年以上もまえ
のこと。ビールを飲むために発明されたストローは、
数千年にわたり改良され、プラスチック製品として
世界じゅうで使われている。しかしそれが今、新たな
問題の元になっていた。



⑬『タカシ 大丈夫な猫』

かりやなつこ ちよ いわなみしよん 岩波書店 《64》
荻谷夏子／著

ケイコさんは、交通事故にあった子猫を助け
た。右側二本の足を失うことになるため、獣
医師に安楽死をすすめられたが、子猫を生かすこ
とに決める。タカシと名付けられた子猫は、ケイ
コさんに見守られ、たくましく生きていく。